

いいやま いいまち 広小路プロジェクト

芸術、まちの再生、賑わい創出 — by TAKUBO

牧師様のいない飯山復活教会を再生 田窪恭治とともに憩いの広場をつくりたい

飯山復活教会のおいたち

飯山復活教会は、長野県の北、豪雪地帯の飯山市に建つ教会です。

飯山にカナダ人宣教師のジョン・ゲージ・ウォーラーがやってきたのが 1893 年のこと。飯山での伝道を続けること約 40 年、1932 年に念願の教会が建設され、現在も当時のままにその姿を残します。放射状に組まれた木造の羽目板は教会に生命力を吹き込むかのように生き生きとしながら端正。寺の町といわれ大小の寺社が無数に並ぶ飯山にあって飯山復活教会は異彩を放つ存在ではありますが、その情緒的な風情は飯山のまちによく似合うのも確かです。

飯山小学校のほど近くに建つ飯山復活教会は、子どもたちの成長を見つめてきました。それは子どもたちも同じです。

「飯山に教会ありますよね」

そう尋ねると、多くの飯山育ちの人が瞬時に反応してきます。

「少しうっそうとした雰囲気は怖くて。でも子ども心にほかの飯山の建物とはちょっと違う、格好いい建物だと思っていた」というのは 40 代の男性。

「小学生の頃、ドキドキしながら礼拝に行ったことを覚えています」というのは 30 代の女性。かつて子どもだった大人たちも、その教会を体験や感情とともに故郷の風景として鮮明に記憶しているのです。

その飯山復活教会に牧師様がいなくなって 20 年。今は同系列の教会の牧師様が片道 40 分の道のりをやってきます。信徒は 12 名ほどで、なかでも教会を長らく守ってきたのは近隣で「赤のれん洋品店」を営む 82 歳の我妻英雄さん。庭を手入れしたり雪をかいたり教会の整備や礼拝の準備などに携わります。対外的なことを切り盛りするのは信徒代表の金子謙一さん。教職を辞したあとはとくに積極的に催しを企画し、チャペルコンサートなども開いてきました。しかし、少数の信徒ではできることも限られています。教会の明るい未来が描きづらくなってきていたことも否めませんでした。

そのとき立ち上がったのが、「いいやま広小路会議」です。飯山市の魅力ある場所のひとつである飯山復活教会を、その前を走る広小路と呼ばれる路地とともに再生させようと、地域の人たちが集まったのです。飯山復活教会の信徒、近隣の 8 軒の店舗のほか、建築家、市役所や商工会議所の職員が集まり、アイデアを出すようになりました。それが 2013 年 10 月のことです。

田窪恭治との出会い

「いいやま広小路会議」の代表を務めるのは、地酒「水尾」を醸す蔵元で、飯山復活教会の南に建つ田中屋酒造店の田中隆太さんです。

「飯山は道徳心のある町」と田中さん。全国屈指の豪雪地・飯山では近隣の人が助け合わねば生き抜けないことから、自ずと施こし施される町になったのだらうと言います。山の端に並ぶたくさんの寺は、豪雪と向き合う人々が限りなく死に近いからではないか、とも田中さんは言葉を続けます。決して豊かな町ではなく、儲ける欲のある人が少ない場所。そこは風景のみならず暮らしの姿勢に古き佳き日本の風情を残した町です。「華やかではないけれど、それが誇りでもある。今まで以上に今までらしい飯山を残したい。目先のことではなく、大人たちが娘、息子たちに何を伝えるか、残すかが大切だと思うんです」。

そんな思いを抱きながら、田中さんが仲間たちとともに飯山復活教会と地域の再生取り組むなかで紹介されたのが、美術家の田窪恭治さんでした。

田窪さんは家族とともにフランス・ノルマンディー地方に移り住み、約10年かけてサン・ヴィゴール・ド・ミュール礼拝堂の再生に取り組んできた人物です。礼拝堂の屋根にはフランスのガラスアーティストによる色とりどりのガラスがはめ込まれ、昼は教会に、夜は空に向かって美しい光を放ちます。内壁には名産である林檎の木が描き出されています。7色の絵の具を30回以上塗り重ねたうえから削りだした線の集積で描いているため凹凸があり、太陽の動きによって林檎の木が揺れているように感じます。その風景は、礼拝堂に息吹を注いだかのようです。こうして再生された礼拝堂は、「林檎の礼拝堂」として、地域の人が集まる場所になりました。はじめは地元の人から不審の目で見られながらの活動だったと田窪さんは振り返ります。それが今では人々から深く愛される場所になったのは、打合せを重ね、暮らしながら礼拝堂の再生に取り組んできたからこそ。10年という歳月のなかで、田窪さんは地域の人と触れ合い心を通わすことで、礼拝堂を建物というハード面から再生するだけでなく、地域の人から愛される場所としてソフト面での再生をも果たしたのです。

田中さんは田窪さんとその仕事を知り、大きく心を動かされます。酒蔵を営む田中さんは、「まちづくり」という言葉のもと、地元のさまざまな活動に参加してきました。一方で、まちづくりといいながら一過性のイベントで終わることに大きな疑問を持ち続けていたのです。そんなときに耳にした田窪さんの取り組みに、一過性ではない光を感じました。知らない土地に移り住み、建物のみならず地域への深い愛情を育みながら礼拝堂を再生する様に心打たれたのです。「この人に会いたい、この人と飲みたい、この人と話したい」、田中さんのこの思いが、田窪さんと田中さん、田窪さんと飯山を出会わせることになるのです。

「夢を描いてほしい」

出会ってすぐ、田中さんは田窪さんにそうお願いしました。その思いに応えて、田窪さんは飯山復活教会とその周辺がこうなったら…という夢をスケッチに描いていったのです。

田窪恭治の思い

田窪さんがはじめて飯山復活教会を訪れたのは2012年10月1日のこと、隣町の飯綱町に講演で訪れた際に案内されたのが、飯山復活教会でした。飯山復活教会を目にしたとき、田窪さんは林檎の礼拝堂に出会ったときのような運命を感じたそうで、「第2の運命の出会い」と言います。というのも、飯山復活教会のシルエットが驚くほど林檎の礼拝堂、サン・ヴィゴール・ド・ミュール礼拝堂に似ていたのです。そして田中さんに会い、田窪さんへの思い、飯山への思いに触れ、「夢を描いてほしい」という言葉にたどり着くのです。

「田中さんは僕の人生ではじめてここまで熱くなってくれた人です。こんなに自分が熱くなったのも久しぶり。できるかできないかではない、人生は限られている、人をしあわせにするのは夢なんです」

何度も飯山を訪れ、田中さんをはじめ飯山の人たちに会い、言葉を交わし、酒を酌み交わすうちに、田窪さんの口からこぼれた言葉でした。田窪さんもまた、その熱意に動かされたのです。

田窪さんは、自分たちよりも長い時間を生きてきた特定の風景とその場所のイメージを表現の対象とするのが「風景美術」であり、作家が制作を終えていなくなった未来においても成長し、生き続けるであろう特定の現場を「風景芸術」と定義します。それは林檎の礼拝堂に携わって以来、田窪さんが思いを寄せること。田窪さんは第2の運命と感じた飯山復活教会で、飯山の人々と歩幅を合わせながら、ここ飯山に「風景芸術」となる「風景美術」をつくりだすことを決めました。

飯山を訪れては教会をたずね、周囲を歩き、駐車場になっている隣接の空間や同地区の商店街や施設を見て回りました。そして、高橋まゆみ人形館や寺町めぐりなど、集客力のある施設や取り組みはあるものの、回遊性があるとはいえないまちであることに気づきます。

そして田窪さんは、田中さんの言葉に応えるように、いくつかのスケッチを描きはじめました。

教会に寄り添うように広場が設けられ、シンボリックな大木がその中央で風にそよぎます。地面には「CORQ® (コルク)」と呼ばれる鋳鉄製のタイルがはめ込まれ、自然の流れとともに変化する様が楽しめます。古い蔵は人形館の分館ギャラリーに改修し、人々が憩うカフェ・レストランやショップができたらいいい。ベンチや花なども配置し、テントやパラソルを立てて市場やオープンカフェも設置したい。商店街は少しずつでいいからファサードに手をいれていく。飯山をめぐる拠点のひとつになった教会と広場には多くの人を訪れ、憩う風景が広がっている。

音や光があふれるような、スケッチができあがりました。

最初の歩みは CORQ®の広場から

風景は人々が暮らしを重ね、生き続けるなかで生まれてくるもので、それが明確に姿を現すのには長い時間がかかります。夢のスケッチを実現するためには、そこに向けて長く走るための覚悟と計画が必要です。

各店舗の改修は、各店舗の経済状況やライフサイクルなど、それぞれのタイミングがあります。催しは少しずつはじめられるかもしれないけれど、やはりそれは一過性のもの。新しい店舗の誘致も必要かもしれないけれど、そのためには具体的な場所のイメージを共有できるものが先にほしい。

そこで田窪さんがまず「いいやま広小路会議」のメンバーとともにつくるのが参道と広場です。うっそうとしてしまった教会のまわりを整え、広場を整備する。最初は教会の前に延びる参道から。そののち広場が誕生し、目に見える変化が生まれることで、夢を共有できる人が増えていく、つながっていくと感じたからです。

広場に敷き詰める素材は CORQ®。CORQ®とは、コルテン鋼という、さびでさびを防ぐという特殊な鉄を使用したものです。田窪さんが林檎の礼拝堂の再生に取り組んだ最後に、地域に密着する田窪さん自身の「感覚細胞」として生み出しました。

CORQ®は、年を経るごとにさびていき、自らのさびが成長しそれ以上の腐食を防ぐという特性を持ち、時間とともに変わりゆく風景を楽しむことができます。そして、さび＝“さ美”は、日本の情緒「侘び寂び」に通じる美しい風景をつくりだします。

“さ美”のある風景は、飯山と強くリンクする風景でもあります。豪雪地飯山では、冬になると道路の中央から融雪のために地下水が散水されます。鉄分が多く含まれる地下水により道路が赤茶色に染まっているのです。豪雪地帯・飯山を象徴する“さ美”の風景と CORQ®は、強く結びつきあうのです。

まずは、CORQ®を敷き詰めた参道をつくりたい、そして広場へ——。

いいやま広小路は今、新しい歴史を積み重ねようとしています。

2015年